

白糠の アイヌ語地名

第4回

○和天別（川）

「和天別」は、アイヌ語の「ウワツテ（多くある）・ペツ（川）」に由来し、和天別川をさかのぼると支流が多くあることから、その名がついたと言われています。

北海道の名付け親で、幕末から明治初期に活躍した探検家の松浦武四郎は、『東蝦夷日誌』の中で、「ウツテ」として次のように記しています。

「ウツテとは五本の指を開きし形と云。此川五六町上にてモトケフ（北より一番）、ヨサウシ（北より二ばん）、ユウル（北より三番）、ルベシナイ（北より四ばん）、サケヲロ（北より五ばん）、…」。

しかし、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三は『永田地名解』や知里真志保博士の解説を引用しながら、「旧記（『東蝦夷日誌』）の五指云々は、言葉の意味というより、その地形説明なのであつた」と述べています。

では、松浦武四郎の日誌にある五つの川は何を指すのか。このことは、白糠地名研究会も明らかにしていません。

【参考文献】○新版『蝦夷日誌』

（上）「東蝦夷日誌」著／松浦武四郎、編／吉田常吉、時事通信社、1962年○『北海道の地名』著／山田秀三、北海道新聞社、1984年



国道38号の下を流れる和天別川

◆和天別河口遺跡

和天別川の河口近くには「和天別河口遺跡」があります。今から1200年前から600年前までの擦文時代の遺跡と考えられています。

1965年（昭和40年）から68年（昭和43年）まで行われた調査では、35力所の竪穴住居跡が見つかっており、そのうち30力所が発掘されました。住居は、一時期に35戸があつたのではなく、改築や新築が行われたことで、35力所になったようで、集落は7〜8戸の規模だったと推定されています。

そして、これらの住居には、この時代の特徴である『かまど』が作られています。

出土遺物としては、刷毛目文様がある土器（擦文式土器）や鉄器



和天別川河口遺跡竪穴住居跡

（小刀、なべなど）のほか、糸によりをかける道具の紡錘車（ぼうすいしゃ）などが見つかっています。

まだはつきりしないところもありますが、これまでの研究では、この擦文文化が次の時代のアイヌ文化へとつながっていったと考えられています。

遺跡の調査にあつた富水慶一氏（当時白糠高校教諭）は、住居のかまどが東側（和天別川の方向）に作られていること、入口が川の下流方向に設けられたと考えられることから「川の上流を神聖な地と考えるアイヌの生活様式を連想させられる」と、アイヌ文化との関連を述べています。

【参考文献】○『北海道白糠町の

先史文化』第二輯・第三輯・第四輯、白糠町教育委員会、1968年〜69年



公民館に展示されている擦文式土器